

【共同発表】

AI 時代における英語教育の現状と今後

——能動的学びを促進するために——

佐々木 昌太郎（北海道教育大学函館校）

伊豫部 隼平（北海道教育大学函館校 2 年）

内山 湊意（北海道教育大学函館校 2 年）

李 子豪（北海道教育大学函館校 2 年）

原田 優作（北海道教育大学函館校 2 年）

高松 愛空（北海道教育大学函館校 2 年）

山田 壮（北海道教育大学函館校 2 年）

西塚 大翔（北海道教育大学函館校 2 年）

技術の進化に伴い、AI や ICT 等のツールが教育現場でも活用される時代になってきている。そこで私たちは、AI を活用した教育が、児童・生徒に能動的学びを促すことが出来るのか、また AI を活用することによって、これからの英語教育がどのように変化していくのかについて興味を持った。本プロジェクトの活動としてまず以下の 3 点を目的として活動した。1 つ目、英語の授業における AI 活用の現状や課題を調査・分析すること。2 つ目、AI 時代において、英語教育の意義とはどのようなものであるかを追求すること。3 つ目、児童・生徒の能動的学びを促進させることのできる AI の活用方法について探求・発信すること。これらの目的に基づいて、地域の小学校・中学校・高等学校の英語教員の方々にインタビューを行い、インタビューから得られた情報に関して考察を行った。

英語現在完了構文における用法の境界性の考察

—— been to と gone to に着目した解釈決定要因の検討 ——

鈴木 聖（龍谷大学文学研究科英語英米文学専攻

修士課程 1 年）

現在完了構文は have + p.p. の形式で完了のアスペクトを表す文法である。先行研究では、過去に生じた出来事を現在との関わりで述べる「現在との関連性 (current relevance)」が現在完了構文の中核的意味であるとされており、この「現在との関連性」に基づいて、主に「完了」「結果」「継続」「経験」の 4 つの用法に分類されている。しかし、用法の分類についてはこれまで一致した見解がなされておらず、また、用法の解釈が曖昧な事例も多く見られる。そこで、本研究では現在完了構文において意味的重複が見られる been to と gone to に焦点を当てることで両者が表す「結果」と「経験」の解釈を決定付ける要因を特定するとともに、「結果」と「経験」の境界が明確ではないことを出来事の「完了」との関わりから論じる。結論として、「結果」用法と「経験」用法は出来事の「完了」から分化する用法であると位置づけられ、完了した出来事を近距離視点で捉えることで「結果」解釈を、遠距離視点かつ属性として捉えることで「経験」解釈を決定付けることを主張する。

Get 文の認知文法的考察

——「存在・受容・変容」の視点から——

石川 博基（秋田市立御所野学院高等学校教諭）

動詞 get は、到達や受け取りという基本的な意味に加え、達成の解釈を伴い、「～になる」の用法では瞬間的な変化を示すとされる。本発表では、こうした「達成」や「瞬間」という概念を、話者の事態認識という観点から再考する。

具体的には、get の「達成」解釈は、行為の過程ではなく終点として到達した結果状態に話者が焦点を当て、そこに存在する文主語に特権的な位置づけを与えるという認知作用に起因すると論じる。また、変化を「瞬間」的に捉える特性は、連続的な変容過程を段階的に把握することへの認知的困難さを反映していると主張する。

このような認知的基盤に基づく分析により、get の多様な用法、歴史的変遷、現代英語における arrive to の再出現、さらには使役構文など、一見無関係な現象群を統一的に説明できる可能性を示す。本発表は、認知文法の枠組みにおいて、get 文の意味を話者による事態の概念化として再解釈する試みである。

日英語話者の時の認識の違いと文法カテゴリー

濱田 英人（札幌大学名誉教授）

尾野(2018)は日本語話者の事態把握の仕方を「体験的把握」、英語話者の事態把握の仕方を「分析的把握」と特徴付けて、日本の小説とその英語の翻訳を比較し、それぞれの事態把握の違いがどのように言語に現れているのかについて説得力のある議論をしている。本発表では、その中の一例を取り上げ、日本語の「た」と英語の過去形が醸し出す世界観の違いに着目する。具体的には、日本語の「た」については「時制」なのか「アスペクト」であるのかに関して多くの議論があるが、本発表では、日本語の「た」は「完了」のアスペクトを表しており「時制」までは文法化が進んでおらず、そのため、日本語話者は場面全体を1つのまとまりのある空間として認識し、その中の個々の出来事を場面全体を構成する要素として認識しているために、それぞれの出来事の独立性（自立性）が低く、それに対して英語が時制を有することから、英語話者は場面の中の個々の出来事を独立的（自立的）として認識していることを主張する。そしてこのことが神経心理学の知見からも支持が得られることを述べる。

[特別講演要旨]

生成 AI で読み解く日本人英語話者の発話力：CAF 指標と CEFR に基づく分析アプローチ

白田 悦之（函館工業高等専門学校）

本講演では、生成 AI を活用して日本人英語話者の「話す力」を多角的に分析する新しいアプローチを紹介します。Zoom や Teams などのオンライン会議ツールで録音された英語の発話を文字起こしし、CAF 指標（流暢さ・正確さ・複雑さ）と語彙の広さ・多様性を定量的に評価します。これらの指標をもとに、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に照らして発話力を客観的に把握することで、学習者の到達度や課題をより明確に捉えることが可能になります。講演では、CAF 分析や語彙分析に用いる具体的なアルゴリズム、実際の会話データの処理方法、そして教育現場での活用可能性について、事例を交えながら解説します。英語教育における「話す力」の評価と指導に新たな視点を提供する内容です。日々の授業や学習支援に役立つヒントをお持ち帰りいただければ幸いです。